

# ムカシの競馬を読む

平成18年・東京競馬場  
安田記念  
優勝馬：ブリッジュラック

© JRA



# 第130回 10年・20年・30年前の6月



いまから10年前、平成18年の6月というと、ブリッジユラックが安田記念を、デイーブインパクトが宝塚記念を制した月にあたる。今まで香港馬が来るときには現地から応援団がやって来るが当時はさらに多く、また同馬のオーナーも来日していた。6月5日付のスコット二子から引用しよう。

「広東語と英語がにぎやかに飛び交うなか、オーナーのワインキヨン、ウォン氏は、香港から一緒にやってきた関係者に囲まれ、最高の笑顔を見せていた。ブリッジユラックは英國でデビューしたが芽が出ず、エージェントを通し香港にトレードされ、ケルーズ師の助言もあって購入（中略）しかも馬券もゲット。『いくら（馬券を）買ったとは言えないが、私はこの馬に多大な信頼を置いています。それで察してほしい』とウォン氏。種類や具体的な金額は明かさなかつたが、馬券でも庶民の想像

「日本生産界への起爆剤になるか。東京近郊で初の3歳馬トレーニングセールが11日、千葉県富里町の両国家畜市場で開催された。公的機関の調教セール（日本軽種馬協会千葉県支部が主催）は国内で初の試み。会場は約500人の関係者でにぎわった」

「15頭の3歳上場馬には社台ファームのほかシンボリ牧場など、大手からも良血馬が名を連ねていたためセリは白熱し、10頭が落札。一千万円以上の高値でも2頭落札された（最高はスイートグレースの41500万円）」

引用記事中に「3歳」とあるのは旧表記なので、もちろんこれはいまでいう2歳トレーニングセール。ただし当時は目の前で走つてみせるのではなく、育成牧場で走つている姿をVTR収録し、それを当日に上映する形が取られていた。後に船橋競馬場で走る→セリは両国でという形になり、さらにその後セリまでして今日に至る。

この前年までは両国市場のセリは今までいう1歳部門だけだったが、来場者も数十人で廃止寸前だったという。そこに起死回生の策として試みられたのがこれだ。

当時競馬マスコミでも注目されたのだが、筆者の知り合いの競馬

「日本生産界への起爆剤になるか。東京近郊で初の3歳馬トレーニングセールが11日、千葉県富里町の両国家畜市場で開催された。公的機関の調教セール（日本軽種馬協会千葉県支部が主催）は国内で初の試み。会場は約500人の関係者でにぎわった」

「15頭の3歳上場馬には社台ファームのほかシンボリ牧場など、大手からも良血馬が名を連ねていたためセリは白熱し、10頭が落札。一千万円以上の高値でも2頭落札された（最高はスイートグレースの4＝1500万円）」

引用記事中に「3歳」とあるのは旧表記なので、もちろんこれはいま

雑誌記者は、「両国市場」と聞いて、総武線の両国駅へ行つてしまつたということもあつた……正解は記事にあるように、富里町（現在は市）である。

両国市場については、30年前、昭和61年の6月にも記事があつた。中日スポーツに掲載された山野浩二氏のコラムである。この昭和61年は現在でいう1歳セッションのみで、29頭が上場され落札は10頭、だつたといふ。合計金額は2450万円だった。ただセリそのものは盛り上がりつていたとは言えなかつたようで、山野氏は、「300万円を超えたのは、競馬会が買った2頭だけでほとんど競馬

この昭和61年6月は、当時珍しかつた海外遠征へ1頭の馬が出発した月でもあった。12日付の報知新聞から引用しよう。

「世界一」のマイラーを目指すギャロップ・ダイナが11日午後8時成田発の日航675便(貨物専用便)でパリへ向けて出発した。吉田照哉・社台ファーム副社長が同行、パリ到着後はパリ郊外・シャンティイ調教場のカニングトン厩舎へ入り、8月17日の第1戦に備える。レースまでの調教を買って出ている柴崎勇騎手は14日、矢野進調教師は7月上旬にそれぞれ渡仏する予定

ご存知の通り、同馬はジャックル

などと書いている。昭和の時代はいまだほどのセリ市場が充実していかつたが、その中でも停滞していたようだ。

みの予定でひと夏を犠牲にして備  
同したこと。6月11日付の中日ス  
ポーツに掲載されたインタビューで  
柴崎騎手は、吉田善哉オーナーや  
矢野進調教師への恩返しに加え、  
「できるだけのことをギヤロップダイ  
ナにしてあげたい」と語っている。こ  
ういう心意気は、馬が強くなつたとい  
まの日本競馬にも残っていてほしい  
ものだ。

# ムカシの競馬を読む



# 須田鷹雄

を超える金額を手にしたようだ」「香港における名物オーナーのひとりなのでだいたい察しはつくが、どうしたことではないだろう。ブリッジヨラックは当時存在したアジアマイルチ

勝つののが目標だった』という若手がいきなり一番大きいタイトルを取ってしまったのだから、世間は驚いた。

度目となる現役復帰を果たした。1年11ヶ月ぶりにキヤニオンロマンが、出走したのは、8日のホツカイドウ競馬『新冠町軽種馬生産振興会特別』。12歳馬の復活に対し、テレビや新聞など多くの道内マスコミが注目した。

ヤレ、ンジのボーナス100万ドルを獲得したのだが、それに近い水準の払い戻しを得ていても不思議ではない。

一方、人間のほうでは若いスターが誕生していた。8日付の日刊スポーツから引用しよう。

「ゴールとともに右手を高々と振り上げたのはデビュー2年目、重賞を勝つたこともなかつた18歳のジョヨキード。史上最年少の東京ダービー制覇。町田は雄たけびを上げながら快挙の瞬間に酔いしれた(後略)」

单勝12番人気ビービートルネードで東京ダービーを制した町田直希騎手である。「今年は重賞を

一方で18歳が即ヅモしてしまった。競馬というものは不思議なものである。ちなみにこの年はアメリカでもフェルナルド・ハラ騎手が18歳でベルモントSを制しており（ジャジル号）、こちらはアファームドで勝ったときのステイリーブ・コーヤー以来の快挙であった。

若い話のあとは、同じ地方競馬からベテランの話。15日付の内外タイムスから引用する。

「97年にデビューから5連勝で羽田盃を制覇。その後、脚の故障により引退を挟んでホッカイドウ競馬に移籍。その後、5戦3勝の成績を残して再び故障を発症して引退していたキヤニオーロマン（牡12）が2

ミが姿を追いかけた。キヤニオンロマンは最初の引退のあと道営で再出発し、10歳時のブリーダーズゴールドカップ出走取消をもつて引退。種牡馬となつたが精虫がないことが判明して2度目の復帰となつた。この復帰戦は3着で、その後3、3、4着と好走を続けたが、9月のレースで出走取消となりそのまま抹消された。それでも12歳・3度目の競走生活スタートで道営オーブンの掲示板に載るのだから、やはりさすがではある。

続いているまから20年前、平成8年6月の出来事。6月12日付のデイリースポーツから引用してみよう。